

清水展著 『草の根グローバル化 ショーン 世界遺産 棚田村の文化実践と生活戦略 』

著者	長坂 格
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	54
号	4
ページ	176-179
発行年	2013-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006944

清水展著

『草の根グローバリゼーション——世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略——』

京都大学学術出版会 2013年 vi+468ページ

なが さか いたる
長 坂 格

本書は、ユネスコの世界文化遺産に登録された棚田群が位置する、ルソン島北部、コルディリエラ山地のイフガオ州フンドゥアン郡ハバオ村を主たる調査地として、人々がグローバル化にいかに対峙・対応してきたのかを、文化表象、海外出稼ぎ、社会開発の実践などを題材として詳細に記述し、考察した民族誌である。本書が依拠する資料は、1997年から12年間にわたり繰り返しおこなわれた、1週間から1カ月間のフィールドワークで得られたものである。

まず本書の概要を要約しておこう。本書は、序論的な第1章と、それぞれ複数の章からなる4つの部によって構成されている。

第1章（「北ルソンの山奥でグローバル化を見る・考える——応答する人類学の試み——」）では、まず、本書がハバオ村を中心に1990年代の後半から進められてきた草の根の植林運動と社会開発に関する報告であること、さらにハバオ村で植林運動を推進するロベス・ナウヤックと、ナウヤックの植林運動を支援・記録する世界的に著名な映像作家、キッドラット・タヒミックの2人の活動と語りが、論述と考察の中心となることが述べられる。本書がこの2人に注目するのは、それによって「表象」、「グローバル化」、「社会開発とコミットメント」というキーワードにつらなる問題系への接近が可能となるからであり、またグローバル化という事象への先住民の側からの「もうひとつの視点」が提供されるからである。

第1部（「地域と世界を結びなおす企て」）では、ナウヤックの植林運動への意味付与の実践と、キッ

ドラットの制作映画およびナウヤックとの協力関係が紹介・分析されている。2人の人生遍歴のみを簡単に紹介すれば、1930年代後半にハバオ村で生まれたナウヤックは、近隣の町の高校を卒業した後、コルディリエラ地方の中心都市であるバギオ市で木彫り置物の制作と販売をおこなっていた。その間、バギオ市でフィリピンの最小行政単位であるバラングイの区長を務め、フィリピン先住民代表団の一員としてニューヨークでの国際先住民年の国連行事に参加するなどしている。その後、ハバオ村を中心に、植林によって棚田と森を保全し、それを観光客の誘致と経済振興、さらにはイフガオ（コルディリエラ山地を主たる居住地とする少数民族）としての尊厳とアイデンティティの確保へとつなげることを目指す運動を始めた。1998年には運動を発展させ、「イフガオグローバル森林都市運動」（以下、「グローバル」）というNGOを設立している。

他方、1942年生まれのキッドラットはバギオ市の裕福な家庭に生まれ、アメリカ留学を経てバリ勤務の国際公務員となったというフィリピン社会のエリートである。しかし、その後映像作家となり、「スペイン風の名前を持ち英語による学校教育の優等生として自己形成したことを否定し」（84ページ）、「真のフィリピン人」として自己を再構築していく過程で、イフガオ文化への憧憬を深めていく。そしてドキュメンタリー制作などを通して、母親の友人であったナウヤックの運動に深く関与するようになる。

第1部の最後の第4章（「表象のポリティクス——文化を資源化する企て——」）では、この2人の語りと活動に対して文化の資源化という観点から考察が加えられている。特にナウヤックについては、彼が植林運動の支持を得ようとする際、村人には植林運動の経済的意義と宗教文化的重要性を、日本のNGOには日本軍の最終拠点であることやイフガオのエコロジカルな生活様式などを強調するというように、異なる相手に対して異なる言葉遣いやレトリックを意識的に使用することが注目されている。

第2部（「グローバリゼーションと対峙した五〇〇年」）では、まず、文化の固有性を強調する傾向にあったこれまでの民族誌やキッドラットのイフガオ理解との比較で、イフガオの外部世界との関わりと、イフガオ側の外部からの介入への主体的対

応も重視するという著者のアプローチが示される。そのうえで、フィリピン共産党=新人民軍が1970年代後半から約20年間フンドゥアン郡を実効支配していたこと、さらに植民地期には、スペインが懲罰遠征や平定作戦を繰り返しおこなったが、イフガオ側の抵抗により平定は失敗に終わったこと、またアメリカ植民地政府の懐柔策が一定の成功を収めたこと、そしてアジア太平洋戦争では山下泰文將軍率いる日本軍主力部隊がイフガオの地に敗走してきた際、フンドゥアン郡でも飢餓とマラリヤや赤痢で多くのイフガオが亡くなったことなどが、文献と口述資料にもとづき記述されている。

第3部（「グローバリゼーションを飼い慣らす」）では、棚田耕作を基礎としたハバオ村の伝統的なくらし、多数の村人の現金獲得源となっている木彫り産業、約20年前から広がった海外出稼ぎについての報告と考察がおこなわれる。海外出稼ぎについては、少なくとも村の総人口の1割近くの149人が台湾、香港、シンガポール、イスラエルなど27カ国で就労しているが、その4分の3以上は女性であり、しかも比較的裕福な家の者が多いことなどが述べられる。またそうした海外出稼ぎの拡大と同時期に、伝統的な儀礼や遊びなどを民族衣装を着て盛大におこなう行事が、各郡で催されるようになったことも指摘されている。

第4部（「草の根のグローバリゼーション」）では、まず、前述のナウヤックが設立した「グローバル」が、著者の紹介を通じて兵庫県山南町のNGOとの協力関係を構築し、JICAや日本の民間の財団などから8年間で総額8500万円の助成金を獲得して、運動を拡大展開させていった過程が詳細に報告されている。著者も関与することになった「グローバル」と日本のNGOの一連のプロジェクト自体は必ずしも成功したとはいえ、その問題点も考察されている。しかし他方で、この両者の連携と活発な相互交流は、「世界の片隅にある」小さな団体が、「グローバル化の趨勢のもとで個別具体的な場所や地域にこだわり、そこに根ざした生活を豊かで意味あるものに作り上げようとしている点で、草の根レベルにおけるグローバル化への積極的な対応や便乗とみることができる」（349ページ）という。

本書の最終章でもある第4部後半の第10章（「草の根の実践と希望——グローバル時代の地域ネット

ワークの再編——」）では、こうしたハバオ村での「草の根のグローバル化」の意味と可能性が検討される。本書で検討された「グローバル」の活動は、グローバル化の進行為、国境を越えた2つの地点に住む人々を「緊密に結びつけ、互いの生活世界に影響を及ぼしあうような空間意識と社会ネットワークの変容」（438ページ）を生み出すことを示している。そして著者はそうした変容に積極的に対応、あるいは便乗してすすめられてきたハバオ村での「草の根のグローバル化」を、「地域を超えた地球大の規模でのつながりの自覚」（441ページ）をもたらすものとして高く評価している。

本書の中で述べられているとおりイフガオについては、「洗練された慣習法や、1000を超える神格とギリシャ神話に匹敵するとも言われる絢爛たる神話群、精緻な儀礼知識と供犠をともなう実践、壮麗な棚田景観」（190ページ）などの魅力から、大変多くの人類学的調査研究がおこなわれてきた。また近年では、開発や海外出稼ぎを扱ったイフガオの人々についての民族誌的研究も刊行されている。しかしそれら多数の民族誌的研究の中であって、本書は次の2点において際立った特徴をもつと思われる。

第1に、本書が、A.アバドゥライが「草の根のグローバリゼーション」と呼ぶ、NGOによる国境を越えたネットワーク構築に関わる、詳細な事例の提示と考察をおこなっていることである。アバドゥライは、グローバル化する世界において、健康、環境、人権、居住、ジェンダー、先住民の権利などの公平性や福祉に関わる特定の課題への取り組みを通して、大小さまざまなNGOが国境を越えて連帯していく動きに注目し、国家からも市場からも独立した第3のスペースを構築しようとする運動として、そうした動きに大きな可能性を見出している〔アバドゥライ 2010, 186-194〕。

第1部と第4部で取り上げられているナウヤックをリーダーとする「グローバル」は、ナウヤックの卓越した行政能力と、真摯であると同時に巧みな意味付与の実践によって、村の内外で著者やキッドラットを含む幅広い支援者を獲得してきたが、ハバオ村を中心に地道に植林活動をおこなってきたNGOである。他方で兵庫県山南町のIKGS緑化協会が、「葛を使った町おこし」を展開する過程で、噴火後のピナトゥボ山での植林運動に関わるように

なったNGOである。その後、当時ピナトゥポ山の
アエタの生活再建について調査と支援活動をして
いた著者の紹介で、ハバオ村の「グローバル」との連
携関係が構築され、「グローバル」とともに各種助
成を得ながら、植林運動と社会開発のプロジェクト
をとともに推進するに至った。

日本とフィリピンの小さな組織が、棚田と森の保
全を課題として連帯し、援助機関からの支援を獲得
しつつも、対等なパートナーとして協働・交流する
ことを志向するハバオ村での社会開発の展開は、グ
ローバル化した世界における、公平性や住民主導な
などを重視した、小さな組織同士の国境を越えた連携
の可能性を示す興味深い事例となっている。また、
著者が積極的に関与することで可能となったこの植
林運動の経緯の詳細な描写と考察、さらにそこで見
出されたいくつかの課題の指摘は、「草の根グロー
バリゼーション」の生成、展開、持続を可能にする
諸条件の検討のための貴重な資料ともなるであろう
[Appadurai 2001, 43]。

第2に、イフガオ州の一村での文化実践と生活戦
略を論じようとする本書が、著者本人の植林運動へ
の関わりを克明に記しているほか、イフガオの出身
ではないフィリピンの映像作家、日本人のNGOス
タッフ、さらにはハバオ村に10カ月間滞在した日本
のボランティアの学生など、これまでの通常の民族
誌ではあまり登場しなかったであろう人々の語りと
活動を、かなり詳細に記述していることである。こ
のことは、ひとつには、これら「外部」の人々との
つながりや交流およびその影響を視野に取めること
なしに、植林運動の展開や、現在のハバオ村の人々
の生活の成り立ちを捉えることはできないという著
者の現状理解と立場を示しているといえる。こうし
た著者の立場は、多くの人々を魅了する、固有の文
化伝統を維持する人々としてのイフガオという民族
イメージや、ナウヤックという魅力的なリーダーを
もつハバオ村の植林運動の特徴をある程度反映した
ものであろう。しかし同時にこうした立場からの記
述は、グローバル化する世界において、ローカリ
ティがさまざまなアクターの複雑な交流と交渉のな
かで生成・変化していく状況を、本書がきわめて具
体的に描き出すことを可能にしているといえる。

また、こうした著者を含む「外部」の人々との交
渉や交流を記述していくという本書の方針は、民族

誌記述についての議論に対する著者の立場表明とし
ても理解できる。第1章において、著者は、「自身
を超越的な立場において他者の世界を自己完結的な
ものして記述し分析してきた」(10ページ)、という
伝統的な人類学的研究のスタイルへの批判を踏ま
え、「客観性を保証するために人類学者が自身を消
し去り、調査地が外部世界と接合している状況を無
視し、自己完結した小世界の他者として描きだす民
族誌を作り続けることはもはや学問的、倫理的に不
可能である」(10ページ)と述べる。ハバオ村の
人々のより良い生活と居場所を求めての交渉の過
程を、現場の問題に積極的にコミットしていく著者
および多様な人々との関わり中で捉えようとする本
書は、ピナトゥポ山噴火後のアエタの生活再建を論
じた前著[清水 2003]から続く、著者による民族
誌記述の議論に対する積極的な対応ともなっており、
読者はそこに、民族誌論を経た現代の民族誌のひと
つの形を見出すことができるだろう。

このように貴重な事例の提示や、後続する研究者
が参照すべき議論や試みが含まれる本書であるが、
副題に沿って本書を「棚田村の」植林運動の民族誌
的研究としてみた場合、「ネイティブ・インテレク
チュアル」(19ページ)であるナウヤックをリー
ダーとする植林運動とナウヤックによる運動への意
味付与がハバオ村の人々にとってどのように受け止
められてきたのか、という点についての記述分析が
不足していることに物足りなさも感じる。海外出稼
ぎを扱った第8章(「山奥からの海外出稼ぎと伝統
の復活——翼を持つこと、根を張ること——」)で
は、高等教育を受けて海外出稼ぎに行ける層と、小
学校レベルの教育にとどまり海外に出ない層との社
会経済生活の格差や乖離の大きさが指摘されている。
第9章(「『山奥どうし』の国際協力——巻き込
まれから参与する人類学へ——」)の「グローバ
ル」が兵庫県のNGOとすすめた植林プロジェクト
の考察においては、「グローバル」のメンバーの多
くは貧しい世帯の者であるため、自発性にもとづく
植林活動という運動の理念の実現が困難となってい
る状況が報告されており、村人の中での社会経済格
差が植林運動への関わり合いの違いを生み出してい
ることが示唆されている。しかし、村の人々の間の社
会経済生活の格差や、そうした格差によって生じう
る海外へと拡大する社会的ネットワークの範囲と密

度の違いが、人々の植林運動への関わりや植林運動に対する理解にどのような影響を及ぼしているのかに関して、詳しい検討はなされていない。また、そうした植林運動への周囲の人々の様々な反応が、ナウヤックによる植林運動の活動や運動への意味付与の実践に何らかの影響を与えてこなかったかという問いも浮かぶ。社会経済的位置を異にする村の人々による植林運動への多様な関わりと理解との関連での、ナウヤックの植林運動の活動と意味付与の実践のさらなる検討は、ナウヤックによるグローバル化への積極的な対応ないしは便乗を、より複雑な関係性の中で捉えることを可能としたのではないかと思われる。

以上、本書の中心的主題である植林運動と社会開発に関わる部分についてコメントを付したが、本書では、コルディリエラ地方における海外出稼ぎや地方政府による文化復興に関する豊富な資料提示、文化の資源化に関する理論的考察などもなされている。フィリピン地域研究はもとより、先(原)住民

や開発の人類学的研究に関心をもつ研究者および実践者に、本書が広く読まれることを期待する。

文献リスト

<日本語文献>

アパドゥライ, アルジュン 2010.『グローバリゼーションと暴力——マイノリティーの恐怖——』藤倉達郎訳 世界思想社.

清水展 2003.『噴火のこだま——ピナトゥポ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO——』九州大学出版会.

<外国語文献>

Appadurai, Arjun 2001. "Deep Democracy: Urban Governmentality and the Horizon of Politics." *Environment and Urbanization* 13(2): 23-43.

(広島大学総合科学研究科准教授)